

縮されてきました。

今現場を離れ、時をおいてみると、自分の、子どもに対する強さに気づかされます。見ず知らずの僻地で、全く新しい環境での生活に心細さを覚えました。それについて、子どもに対して随分強気であったと思えてきました。自分を強く出しすぎていなかったかしらと、今からでは遅いのですが自問しています。

子ども達と「存分に生きる」生活は、成長すること、育ち合うことのすばらしさを教えてくれました。それは、子どもの傍にいる者として、この上ない喜びで、保育者冥利に尽きるものです。たくさんのかうした体験の中で、二人の事例を御紹介いたします。

一、M君のこと

Mは四歳児の時私のファミリーでした。ひとつ上の年長児Hは、とてもMが気に入り、よくMを誘って遊んでいました。何事にも消極的なMは、Hの言う通りに動いていました。私はぱっと晴れやかなMの顔はあまり見た

ことがなく、気持ちが悪どこかつつかえているなと思っていました。Hが卒園し、Mは年長になり、頼れる友達がいなくなりました。今までは自分で決めなくても、Hが引っぱってくれました。事態が全く変わったのです。Mは朝遅く登園し、母親とすつきり離れることができず、さえない表情が続いていました。気がつく、ほとんどの子ども達が元気に外で遊んでいる時、部屋でゴキブリを見つけていたりしていることもありました。Mは体を動かす遊びが嫌いではないので、楽しめそうなグループで遊びに誘ったりしましたが、あまりぱっとしませんでした。こうした事態の中で、Mは心の壁を越えようとしている、と気づいたのは二つの活動を通してでした。

(1) 家を描く 五月初旬

週二回行われているモンテッソーリ教育の中で、「自分が住みたい家と思う家、自分の家を描きましょう」という課題画の時間がありました。子ども達は大きな紙を

もらい、床でまずえんぴつで描くように勧められました。MはHがいる時は、たいていHのそばにいて、Hの作品をまねて描いていました。ところが今はHがいません。Mは困ったように、えんぴつで描いては消し、描いては消しで、なかなか進みません。時々助けを求めるように、心細そうに私の方を見えています。私はただ「がんばってね」と励まします。Mは二日目に描き上げ、私の方へ自信なさそうに承認を求めるように、持ってきました。何度も消されている中に、がんばった過程がうかがわれ、私は「よくがんばったわね」と言いました。

子どもと接している時は、Mが困っているなと気づいていても、それがMにとってどんなに深いものであるかはわかりませんでした。Mのその後の歩みを見、ふりかえてみるとその時の気持ち共感できます。Mはほんとうに辛かったと思います。私がつとその時にMの気持ちを察してあげられたら、と今にして反省します。家の絵は、心の状態を表すといっているでしょう。家は安らぎの場です。子どもたちにとって、守られている暖か

い場です。屈託なく画面いっぱい大きな家を描く子どももいます。たいていの子どもは、太陽が輝き、えんとつが天に向き解放的な明るい絵でした。しかし、中には雨が家に降りしきり、雷さえ描かれた防衛的な絵もありました。Mは、この時まだ保育園で心の安定が得られていなかったのでしょう。ですから自分の心の安定の場(家)をイメージすることはむずかしかったことでしょう。しかし、Mは投げ出さないうで、またいいかげんで終わらないうで、よくがんばりました。その粘り強さに感心させられました。そして、Mがだれかに頼らないで、自分で立てるよう、自分を見いだそうとしていると察せられます。

(2) お話し作り 六月

モンテッソーリ教育の活動の中で、お話し作り、文字書きの活動が用意されました。一枚の紙の上半分に線書きの絵が印刷されており、下半分に、その絵を見てお話し作り、文字を書くものです。名詞に形容詞をつけて、動

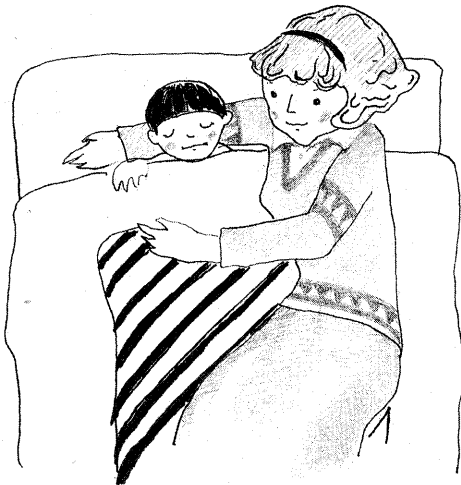
詞でしめくくりまします。Mは、自動車画面の中央に描いてあり、町を走っている光景の用紙をやり始めました。なかなかえんびつを持った手が動きません。そのうち、「あかいじどうしゃがはしる」という多くの子ども達も考えつく文章を書きました。やっとできたなと思つていきますと、それをみんな消してしまいました。そして今度は、さつさと「お父さんが白い車に乗って会社に行きまします。」といったような文章（手元に実物がなく、不確かな文章で申し訳ありません。）を作りました。私が感心して色ぬりを勧めると、Mは満足そうに、色えんびつで車の絵を丁寧にぬりました。でき上がると、別の絵の用紙のお話作りに、今度は楽に取り組んでいました。車の絵は、その日の降園時に、お母さんにも見ていただきました。このMの活動から、Mは自分らしさを見いだそうとしていゝる、と私は感じとれました。一度はたいいの子どもが思いつく文章を書いてみたものの、それに飽き足らず、自分でお話を考えました。主語をお父さんにしたことが私の心に印象深く残っていました。一つの絵を

前に、Mは自分の身のまわりのことを思い浮かべました。家の中心であるお父さん。車のハンドルを握るお父さん。自分の中に、お父さんの強さ、頼もしさ、主導権を得たいという願望を、この活動から読みとることができまします。

(3) 紙芝居作り 五月ゝ六月

五歳児の活動で、五月に紙芝居作りを考えてみました。まだ友達関係が充分についていない時に、グループ活動は無理があるかもしれないと思いつつ、投げかけてみました。気の合った仲間同士で、まずお話作りをさせました。私は子ども達の中に入って、ヒントを与えたり、いっしょに考えたりしました。なかなか考えつかないグループには、私が最初お話を作り、続きを子ども達で考えさせたりもしました。M達は、「三びきの子ども」ならぬ「三人の子ども」という愉快なお話を男児五人で考えました。三人の子どもが、お父さんとお母さんに、それぞれ家を作るように言われます。一番目の子ども

もは、お菓子の家を作り、二番目は木の家、三番目はコンクリートの家を作りました。大男が家をこわしに来ます。お菓子の家も、木の家も、大男のハンマーでたたきこわれます。コンクリートの家は、ハンマーではだめで、鎖についた鉄の玉をぶつけます。ところがその玉が大男に当たり死にました。というところまでお話ができました。紙芝居作りは、お話作り、場面のつながった絵を描く等、数日を要する総合的な活動です。うまくまとまったグループもあれば、まとまらずそれ以上続けることは子ども達に無理で、無意味とさえ思えるグループもありました。それでしばらく置いておきました。六月の梅雨の晴れ間、珍しくMは、園庭で思いっきり体を動かして友達と遊んで、部屋に入ってきました。私は紙芝居の絵を描いてみたらと思い、子ども達に誘ってみました。M達はさっそくお話の絵を描き始めました。大男を画用紙いっぱい描く子ども。表紙に三人の子どもの絵を描いて、名前も考えて書きました。生き生きと楽しんで子ども達は描いていました。Mは一枚描いた後、お



話の最後に、「お父さんとお母さんと子ども達は、夜ドライブに出掛けました」という絵を描きました。いつもは消極的なMが、意欲的に取り組み、ほんとうに楽しく描いていました。子ども達が試練を通してたくましくなり、お父さんとお母さんといっしょに楽しく車を出

掛けます。まわりが真暗な夜でも大丈夫なのでしょう。

(4) 迷路作り 七月

年長児は七月末に、一泊の海浜保育が計画されています。Mは行きたくないと言ったので、朝も気持ちよく保育園に行かないと、母親がファミリー担任に告げました。私は、Mの状態を見て大丈夫だと思っていました。担任は特に夕方の時間に、Mと心掛けて遊び、かわっていました。一泊保育の前にやりごたえのある、まとまった活動を組みたいと私は考えました。ちょうど父兄から立派な木をもらいました。くぎ打ちはほとんどの子どもができるので、木工もいいなと思いました。それで、パチンコ作りをやってみようと計画を立てました。まず自分の好きな迷路を、子ども達に方眼紙に書かせました。特に男児は迷路作りが好きで、よく昼食後や夕方に迷路を書いていました。次にその迷路を木片に写します。私、くぎを打つところに印をつけます。子ども達はくぎを打ち、次に道に沿って糸をかけて、でき上りで

す。くぎ打ちよりも、糸かけの方が神経を使います。糸がゆるまないように、また一筆書きのようにかけ残しないようにかけます。でき上がると、パチンコ玉をころがして遊びます。Mはこのパチンコ作りがとても気に入り、もう一つ作りたいと言っていました。二個目は細かく複雑な迷路を考えました。Mにとってこの活動は、心に響く充実した活動のようでした。そして数日後の夕方、Mは友だち三、四人と砂場いっぱい、きれいな迷路を作りました。ほんとうに見事な作品でした。迷路は複雑に入り組んでいますが、自分で道を作る活動です。Mが自分の心に道筋をつけて、自分の心を写し出しているようでした。私はこの砂場の作品を見て、Mが壁を自分で乗り越えたこと確信しました。一泊保育は、母親の心配もよそに、楽しく過ごせました。

(5) 二、三学期

九月は保育園の十周年記念式典があり、年長児は、歌でつづる司会役を果たしました。その中で合奏もやりま

した。楽器を決める時、Mはメロディーベルをやりたいと立候補をしました。自分から積極的に意思表示をすることは、Mにはまれなことです。十月の運動会では、競技で使うとび箱が、早々ととべるようになり、自信満々でした。高いとび箱をとぶために、Mは一目散にかけて来ます。猪突猛進です。(Mは因みに亥の年生まれです。)とび箱と合わせて板登りもしました。高さ1.8メートル程の板(台)を70度位傾斜させて、そこをかけ登ります。Mは、ただひたすら目標めざして全力でぶつかって行きました。実にたくましくなりました。運動会が終わり、動いているところ、やっているところの絵を描いてみましょうとすすめました。Mは、とび箱をとんでいるところを描こうとしました。ところがなかなかむずかしく、何回も消してはやりなおしていました。しかし、(1)の家を描いた時とちがいで、「またダメだな」と近くの友達と会話を楽しみながら、取り組んでいました。私も安心して見ていられます。そして私がとび箱をまたいで、モデルになったりしました。一日目は時間切

れで、うまくまとまらず、二日目にやっと思い通りの絵が描けました。一枚の画用紙では足りず、もう一枚つなぎました。足がスーッとのびて堂々とした、生き生きとした作品ができました。二学期は、朝登園するとさっそく広いグラウンドでサッカーや「泥棒と警察」に参加しました。夕方の時間は、保母が入らなくて、むしろ子ども同士で新しい遊びを考えて遊んでいました。卒園が近づき、「僕が大きくなったら」の絵を描きました。Mはケーキ屋さんの絵を描きました。大きな紙の中央にしゃれた家を描いてあります。(1)の家の絵が描けなくて困っていた時と全く違います。お客さんが後ろ向きに描いてあり、幅と余裕を感じさせるMらしい絵が描けました。

二、S君のこと

Sは運動能力が優れていました。ところがスキップがまだうまくできませんでした。五月初旬のモンテッソーリ教育の時間に、スキップの活動がありました。そして、ひとりずつスキップをするようにと主任先生が言

い、一番にSが指名されました。Sの緊張はどれ程だったでしょう。困って体が動きません。しばたく目が赤く見え見えます。私は「頑張れ！」と心で励まします。しばらく沈黙が続きます。数分後緊張を破って、ひとりの男児TがSのあたりでスキップを始めました。主任先生は、「T君といっしょにやっこらん」と言われました。それでもすぐにはSの足は動きません。そのうちSはTとやり始めました。最初はうまくできませんでしたが、何回も繰り返し返すうちに、とうとうSはスキップができるようになりました。みんなもいっしょに喜びました。ほんとうに頑張ったS君、そしてさりげなく保育者めのかかわりをしてくれたT君、できたことを喜び合うみんな。何とも言えない感動がありました。

Sはこれまで自分が負けることを嫌がり、鬼になるとに抵抗がありました。自分がつかまったら、遊びを止めたりしていました。また自分や、自分のチームが負けると、ひどくくやしがり、何かと言いつつ訳をしました。友達の前で自分ができないことを見せるなんて、Sのプラ

イドが許さなかったのでしょう。主任先生もSのそうした心をよく察し、すぐには助け舟は出しませんでした。SはTの助けによって、難局を打開しました。この出来事を境にして、Sの固い殻は破れ、大きく成長しました。弱さや負けを怖がらず、素直に自分を出すことができるようになりました。いろんな活動に積極的に参加し、楽しめました。自分らしいのびのびとした作品をつくさん作りました。また、友達、年齢の小さい友達にも、やさしくかかわり助けてくれました。

*

M君、S君に限らず、どの子どもにも成長の歩みがあります。しかし、もっとよくかかわってあげればよかった、と少し心残りのある子どももいます。でも今、"ありがとう" "がんばってね"の思いでいっぱいです。